

《第十六章・束縛と解脱を考察する。》

第三項 [束縛と解脱が本性として有ることを否定する] に二項目がある。[本義]、[その理由を否定する] である。

第一項 [本義] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く] に三項目がある。[輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する]、[束縛と解脱が本性として成立したことを否定する]、[涅槃の爲に努めることは無意味であるという背理を斥ける] である。

第一項 [輪廻と涅槃が本性として成立したことを否定する] に二項目がある。[輪廻が本性として成立したことを否定する]、[涅槃が本性として成立したことを否定する] である。

第一項 [輪廻が本性として成立したことを否定する]

ここに言う。「諸事物は本性として有る。(何故ならば) 輪廻が本性として有る故である。衆生から他の衆生へに行くことを『輪廻』というけれど、諸事物が本性として無ければ、その時、誰が以前の衆生から後の衆生へ行き、輪廻するのか。(それは、例えば) 石女の子の如くである。」

これを否定するに当たり二項目がある。[取られものである蘊¹が輪廻することを否定する]、[取る者である有情²が輪廻することを否定する] である。

第一項 [取られものである蘊が輪廻することを否定する] に二項目がある。[恒常が輪廻することを否定する]、[無常が輪廻することを否定する] である。

第一項 [恒常が輪廻することを否定する]

もし輪廻が本性として有るならば、蘊と有情の二つの何れか一つが輪廻しなければならないが、そこでもし、「行—蘊が輪廻する。」といえ、それも恒常である・恒常ではない、の二つに限られる。しかし、それが恒常であれば輪廻しない。(何故ならば) 行き来の行為と離れた故と、以前の衆生より来て後に行かなければ、輪廻する者として矛盾する故である。

¹ 蘊：心と身体の集積。[序論] 脚注 88 参照。

² 有情：仏陀以外のプトガラに付けられた呼称。[序論] 脚注 50 参照。

第二項 [無常が輪廻することを否定する]

もし、無常である行が輪廻するといえ、無常であるとしても輪廻する者として、自性として有ることにはならない。(何故ならば) 無常とは生じたやいなや壊すが、壊失した諸物は再度輪廻しない故である。

『あるいは、因果である行が一つ一つ連なる、途切れぬ次第である無常のみが輪廻する』と思えば。

ここで前後の瞬間に分けられずに、前後時に行き渡る継続が輪廻するのか、前後時それぞれの瞬間が輪廻するのかという二説より、後者を否定するにあたり、先ず前後それぞれを否定する。

結果である生じるだろう後の瞬間は、輪廻する者として適さない。(何故ならば) それは如何なる以前の衆生よりも来ておらず、如何なる後の衆生へも行かない故と、輪廻する者にはその二つの行為が必要である故である。

壊失した以前の因も輪廻しない。(何故ならば) 如何なる以前の衆生よりも来ていない故と、如何なる後(の衆生)へも行かない故である。壊失した以前の行と、ただ後が生じていない行以外、過去と未来の行は無い故と、その二つもまさしく壊失し、まさしく生じていないことによって、輪廻者として有るのではない故に、過去と未来の行は輪廻する者として存在するのではない。

『もし、その二つは輪廻しなくとも、後の瞬間が生じるなら以前が輪廻するので、行の前後双方に応じて輪廻する者であると置く。』と思えば。

前後の瞬間は本性として同一であるか? 別であるか? と考察される。前者のようであれば適さない。(何故ならば) 因果であり、前後関係がある故と、以前が失壊し、後が生じる時点は各々である故である。第二番目の考察のようであろうと、後の瞬間が生じたならば以前が輪廻するとは適さない。(何故ならば) その二つは自性として別である故である。

不定因³でもない。そうでなければ、凡夫が輪廻に生まれることが有ることによって阿羅漢方も輪廻することになり、他の灯明が燈れば消えた灯明も燈るとなる。(何故ならば) 無関係、別他の意味であると等しいながら、二つ(凡夫と他の灯明)の前後の瞬間は、一つが生じたことによって一つが廻るが、他の二つ(阿羅漢と消えた灯明)にはそのように主張しない理由が無い故である。

他にも、後の瞬間が前の瞬間より生じるならば、失壊した前瞬間か、失壊していない前瞬間か、滅しつつある前瞬間の何れより生じるか?

失壊したものより生じるならば、焼けた種子よりも芽が生えるとなるので、無因となるだろう。本派は「失壊した」を事物であると承認するが、失壊した前瞬間より後が生じるとは承認しないと既に説いたけれど、それ故に、そのように否定する。

³ 不定因: 確かでない理由。[第 14 章] 脚注 3 参照。

失壊していない前瞬間より生じるならば、種子は様相として変化しておらずに結果が生じ（る背理となり）、因果の二つが同時（の背理）となるだろう。世俗として、失壊していない以前は後の直接因であると承認はするけれども、ここでは自らの性相としての生を否定するにあたり、そこで前述のようにそれらの過失が当たる。

壊れつつある瞬間より生じるならば、「失壊した」「失壊していない」の二つ何れでもない「壊れつつある」は無いが、その二つについても過失を既に述べた。

そのように、前後の瞬間に分けたそれぞれと、二つを合わせた場合に、輪廻する者であるという主張を否定し、前後するものである場合に同一と別を否定し、前より後が生じることが本性として有ることを否定した故に、自性として成立した前後の瞬間と因果は設けられようが無いので、それに依拠した継続も無い故に、継続においても輪廻は自性として有るのではない。

他部（非仏教徒）が、一生一生連なる衆生である輪廻者を主張する一切は、蘊より別本質の、実質の有るプトガラ⁴が輪廻すると主張する。それ故に、行あるいは蘊が輪廻すると言う者は自部（仏教徒）であるが、それもプトガラとして置く基体は、概ね識（意識）であると主張するので、阿頼耶識⁵等の識が輪廻すると主張し、まさしくそれを「プトガラは輪廻する」とも言うが、前後の瞬間に分けていない継続自体を、輪廻であると主張する。

第二項 [取る者である有情が輪廻することを否定する] に二項目がある。[蘊より別本質の有情が輪廻することを否定する]、[蘊より自とも他とも述べられないプトガラが輪廻することを否定する] である。

第一項 [蘊より別本質の有情が輪廻することを否定する]

「仮に、正理と反するので、行が輪廻しないことは真実ではあろうが、蘊より別本質の、実質の有る我が輪廻する。」といえど。

それに似た有情が輪廻することについても、行が輪廻することを不合理とする、この一切の次第は等しいので、正理ではない。（何故ならば）恒常であれば行き来の行為をなさないの、恒常は輪廻しない。しかし無常の有情についても、瞬間と継続性についての分析によって、輪廻するとは不合理である故である。

第二項 [蘊より自とも他とも述べられないプトガラが輪廻することを否定する]

もし、正量部⁶説者達が、「恒常か無常の行が輪廻するとは不合理であるという分析が、有情について等しいと言うことは正しくない。（何故ならば）我とは蘊より

⁴ プトガラ：心身の集積に名付けられた「者」。[序論] 脚注 50 参照。

⁵ 阿頼耶識：仏教徒唯識派の主張する、「者」と名付けられる最も基底となっている意識。

⁶ 正量部：部派仏教の一部。プトガラ（人）に実質が有るとする。

そのもの（自）か他であると不可説であるように、恒常・無常の何れとも不可説のプトガラが輪廻する故である。」といえよ。

プトガラが輪廻することが自性として有るならば、そのプトガラは、諸々の蘊と處⁷と界⁸に対して、同一か別か等、前述の五様相によって探したなら見出さなければならぬ。それにも拘らず見出すことが無ければ、本質として有る我は何が輪廻するとなろうか。そうはならぬ。

他にも、ここで人の近取⁹より、天の近取へ輪廻するならば、人の近取を手放して、あるいは手放しておらずに行くことが本性として有る。前者のようであれば、前後世二つの間に近取である五蘊の有¹⁰は無くなる。（何故ならば）以前の近取を手放して後が得られていない時が有る故であり、本性として成立したならば、前後を取捨する二つの行為は同一時に適わない故である。その二つの間に有は無く、近取の蘊が無ければ、「我」と名称を付ける因（拠所）が無いので、そのプトガラとは何であろうか。何も無い。それが無ければ、起こるだろう天である近取者のプトガラも無い故に、何を輪廻するとなろうか—それに輪廻するとなる、それも無い。

あるいは「取る者が無いので、輪廻する行為の何をするととなろうか。」という「行為」は、輪廻の一部特性として当てる。

もし、後者¹¹のようであるとしても適わない。（何故ならば）前世の有を手放してないまま後世の有を保持した故に、一人の我が天と人の二つの我となるが、それを主張するのでもない。

もし、「天と人の二つの有（輪廻の生）の間に天の中有¹²が有るので、有の無い我が有ることにはならぬ。」といえよ、それも不可である。（何故ならば）人の有より天の中有へと輪廻するにおいても、以前の有を手放して以前の有を手放して輪廻する・しないという先の分析と等しい故である。

「何？人の有を手放したことと天の中有を得ることの二つは、同一時であるので、以前を手放したことと後を得たことの二つも同時である故に、その二つの間に、近取の無い我が有るといふ過失は無い。」といえよ。

何？一方の我が以前の近取を手放し、他の一方が中有へと駆け込むのか？あるいは、そのような部分はそれぞれに無く、一切の我性が以前を手放し、後を取るのか？と考を問えよ。

そこで前のようであれば、その時人の有を手放し、天の中有を取る二人の我が有

⁷ 處：十二處。六根六境。[第 1 章] 脚注 157 参照。

⁸ 界：十八界。六根六境六識。十二處に六根と関わる六種の識（知覚）を加える。

⁹ 人の近取：人間の五蘊。「天の近取」も同様に考えるが、無色の天に生まれるならば四蘊。

¹⁰ 有：輪廻での生。

¹¹ 後者：人の近取者より、天の近取者へ輪廻するならば、人の近取を手放さずに行く場合。

¹² 中有：前生で死んで来生に生まれる前の、中間の有（輪廻）。

となるだろう。後のようであるとしても、その二人の間に有の無い我が有るとなるだろう。前述との違いは、中有へ動くのであれば（二つの間が）非常に近いので、短時間近取が無くなるとなる、ただこれだけである。

ここで、前後二つの有の間においては「蘊の無い我」であると、対論者が承認しなければならぬ理屈とは、「これを手放す。」「これを取る。」と行為対象に依拠した取捨の二つの行為は、前後時のそれぞれの蘊である対象に依拠したものであるが、その時「これが手放す。」「これが取る。」という行為者に依拠したことも、一つの事物において同一時には不可である。（何故ならば）その二つが同一時であるならば、行為の拠所である人と、中有の二つの蘊も同時となる故であり、本性として成立したならば、依るものは拠所に一切の時点において間違いなく（依拠する）故である。そのように、取捨の二つの行為が前後時であれば、既に手放した以前の有と得た後の有の二つも前後することになるが、それ故に、以前を既に手放して後を得ていないその場合に、有の無い我が有ることになる。

第二項 [涅槃¹³が本性として成立したことを否定する]

もし、「輪廻は本性として有る。（何故ならば）対するものである、涅槃が本性として有る故である。」といえば。

苦しみより超越する者である超越者も二種に確定するが、それも行、あるいは蘊が、苦しみを超越することが本性として有るとは、如何様であろうと一如何なる様相であろうと不合理である。しかしそれだけでなく、蘊より別質の有情や、蘊自体か他であると不可説のプトガラが、苦しみより超越することが本性として有ることも、如何様であろうと合理にはならない。

それらの正理とは、「それらは恒常であれば超越せず、」¹⁴等と、読み方を変える。

そこで、蘊かプトガラでも構わぬが、輪廻者が真実として成立したことが否定されていなければ、それらが輪廻を廻ることが真実として成立したことも否定されない。輪廻者が真実として成立したことが否定されれば、涅槃を得る者、あるいは会得者が真実として成立したことも否定されたとなる。そう見れば、真実である「会得者が得られる対象を得ること」が否定されたが、それ故に、これらが得られる対象として真実であることも否定された。然れば、涅槃、あるいは法身が真実として成立したことも否定されなくてはならない。（何故ならば）それら（涅槃・法身）が真実として成立したならば、得られる対象が真実として成立しなければならぬので、「得られる対象」を否定したならば、涅槃・法身に）行き渡るものが否定された故である。

これら正理の推察法を知る要によって、聖者の国（インド）の自部（仏教徒）実

¹³ 涅槃：チベット語直訳では「苦しみを超越した」。

¹⁴ 「それら…せず、」：『根本中論』第 16 章 1 偈 2 行目の言葉を変換する。

在論者も、輪廻と涅槃について真実が成立した・成立していないという違いを勿論分けはしないけれど、本派の「正理の推察法を知らぬ対論者達」はそれに対して違いを分ける。

そのように涅槃も自らの自性として有ると成立していないことをお考えになり、『般若母』より、

「生者、須菩提よ。涅槃も幻の如く、夢の如くである。生者、須菩提よ。仏陀の諸法も幻の如く、夢の如くである。」

等より、

「種姓の子よ。もし、涅槃より甚だしく優れた他の法が有るとしても、『それも幻の如く、夢の如くである。』と、私は言う。」

や、『三昧王経』よりも、

「勝義諦¹⁵は夢に似ており、涅槃は夢に等しいとなる。賢者がそのように入ることも、それは心意の最高の律儀であると述べられる。」

や、

「滅諦¹⁶は夢そのままであり、涅槃も夢の本性であると、それに菩薩が言葉当てる。それは言葉の律儀であるという。」

と、本性が無い意味を作意すれば意の律儀と、言葉として言えば最高の言葉の律儀であると説かれた。(何故ならば)「律儀」とは捨て去るべきものを慎むことであるが、『それによって一切の過失を根こそぎにする故である。』と御考えになられた。

第二項 [束縛と解脱が本性として成立したことを否定する] に二項目がある。[束縛と解脱が本性として有ることを共通に否定する]、[それぞれに否定する] である。

第一項 [束縛と解脱が本性として有ることを共通に否定する]

もし「君が、輪廻と涅槃の二つを否定はしたが、束縛と解脱は本性として有るので、諸事物は本性として有る。」といえは。

ここで貪欲等の諸煩惱とは、束縛されるものを自由無くするので「束縛するもの」であり、「それによって束縛された凡夫達は三界より超越しない。」と置くならば、貪欲等が束縛するものであると考察した「束縛」は、恒常に適正でないことは易しいので、先ず、生壊の主体である刹那滅¹⁷の諸行を束縛しない—束縛することは自性として無い。継続とそれぞれの刹那において不合理であることは、前述の如くである。それらにおいて解脱するとなるものも自性として無い。理由は前述の如くである。

¹⁵ 勝義諦：聖なる真実。[序論] 脚注 64 参照。

¹⁶ 滅諦：苦しみとその原因を滅した聖なる真実。四聖諦（[第 1 章] 脚注 166 参照）の一。

¹⁷ 刹那滅：無常の定義。一瞬一瞬滅すもの。

先に、行について束縛と解脱が不合理であると説かれた論法の如く、有情も束縛せず、解脱するともならない。あるいは、恒常も無常も輪廻せず、超越しないと説かれた論法の如くである。

第二項 [それぞれに否定する] に二項目がある。[束縛が本性として有ることを否定する]、[解脱が本性として有ることを否定する] である。

第一項 [束縛が本性として有ることを否定する]

もし、行と有情において束縛と解脱を否定はしたとしても、近取である貪欲等が束縛するとなれば、存在するので、束縛も本性として有る。」といえは。

もし、近取が束縛するものとして、自性として有るならば、二種を超えることはない。それも「貪欲等の束縛するものと共にある近取においては、束縛するとならない」といい、束縛することは本性として無い。(何故ならば、束縛することが) 有るならば、そこに再度別意の束縛するものが有る必要があるが、再度束縛することは無意味である故である。束縛される対象と束縛するものが本性として成立したならば、「これは束縛された」という束縛する行為と、「これが束縛した」という束縛する行為の二つを別他の実質としなければならないので、既に束縛されたものを再度束縛しなければならないが、第八章で説かれた正理に似ている。¹⁸近取が無くとも束縛しない。(何故ならば) 束縛するものと離れた故に、如来の如くである。

そのようであれば、如何なる場合になったものが、束縛するとなろうか。(それは) ならない。

他にも、以前に有る鉄鎖等の束縛するものが、束縛される対象を束縛するが如く、もし、束縛される対象の以前に、束縛するものである貪欲等が成立したならば、それによって行かプトガラを束縛することに至るが、それも無い。(何故ならば) 拠所が無いので貪欲等は成立していない¹⁹故と、先に束縛することが成立したならば後に束縛される対象と関係する必要性が無い故と、束縛するものより自性として別に成立した束縛される対象を、再度束縛することは必要性無い故である。

この残りの批判は、過ぎた・過ぎていない・歩むを否定した読み方を変えて示された。それも、「先ず、束縛したものを束縛せず、」²⁰等と当てはめる。

¹⁸ 第八章で…似ている。: 第 8 章。「このように、その(壺を)作る業(行為)は壺師と粘土の二つともに依拠しているが、その二つの拠所が自らの定義として各々に成立したならば、行為も主体ごとに分かれて各々に留まる必要があるので、共通に一つの行為に依拠することは矛盾するのであり、以前既に説いた如くである。

¹⁹ 拠所が無い…いない: 行かプトガラの以前には行もプトガラも無いので、行である貪欲等の心所も、拠所である行が無い故に無い。

²⁰ 「先ず、せず、」: 『根本中論』第 2 章 1 偈の言葉を変換する。

第二項 [解脱が本性として有ることを否定する]

「仮に、君が束縛することを否定したとはしようが、解脱は有る。束縛されていないものに解脱は無いので、束縛も有る。」といえよ。

解脱が本性として有るならば何処に有ろうか。先ず、束縛されたものにおいては解脱せず—解脱は本性として無い。(何故ならば)束縛された故である。

「仮に以前に束縛されたものは、修行道が修習される手段に依拠して後に解脱するとなる故に、まさしく束縛されたものに、解脱は本性として有る。」といえよ。

ならば、「束縛されたものは解脱するのではないが、束縛されたものが解脱するとなるだろう。」というのみになるだろう。

もし、『前の時点で束縛されたものは、後時に解放される現在時点に近いので、そのように述べる。』と思えば。

解脱が自らの本質として有るならば、それと近いことが有るともなろうが、束縛されたものを否定して解脱は自らの本質として無いと示そうとする時、現在時点の自らの本質として有る解脱と近いことは無い。

それだけではない。煩悩によって束縛されていないプトガラにおいても、解脱が自性として有るとはならない。それが解脱そのものであるならば、それが再度解脱する、何の必要があろうか。再度解脱に相互関係する故に、既に解脱された阿羅漢においても束縛することが存在するので、束縛されたとなるだろう。

この正理は如何様なものかと思えば、「解放された者」と「解脱涅槃」の二つ共が輪廻より解放されたとされなければならないが、その二つが自らの性相として成立したならば、「解放された」という一つの行為によって(二つを)置くことはできないので、それぞれに(行為が)必要である。しかしその時、解放された行為を具えることによって「解放された者」と設けたより他の第二の行為は無いので、「解放された者が解放された。」とは不合理である。しかし第二の行為があれば、既に解放されてから再度解放されることに相互関係するので、阿羅漢にも再度解放されることが必要になるだろう。

『何?束縛されていないものに解脱は無いので、束縛されたものが解放されるとなる。』と思えば。

束縛されたものが解放されつつあると、自性として成立したならば、束縛されたものと解放されつつあるものの同分²¹である故に、束縛されたものと解放が同一時となるが、それはあり得ず、光と闇の如くである。これは前述で、「生じつつある」が自らの自性として有るならば、その時に「生じるだろう主体」が有ると説かれた

²¹ 同分：複数の性質 (A と B) の共通の拠所。A と B 両方であるもの。

ことに似ている。²²

第三項 [涅槃の為に努めることは無意味であるという背理を斥ける]

もし、「輪廻と涅槃や、束縛と解脱も自性として無ければ、解脱を求める者が『我は何時（輪廻の生を）取る事無く、苦しみより超越する（涅槃を得る）だろうか。その涅槃が、我がものと何時なるうか』と思うことは無意味となり、彼らによる布施や持戒や聞思修する等の、将来涅槃を得る目的を持つ諸々の次第も、無意味となるだろう。」といえは。

一切の事物は影像の如く本性が無く、我と我がものは自性として有ることが欠如する。しかし、我と我がものは自性として有るとする見解が起こされ、「我は再びの輪廻を取る事無く苦しみを超えよう（涅槃を得よう）。涅槃は我がものとなるだろう。」とそのように解脱を望む者が執するとなる、彼のとらわれは、近取一壊れる集積に対する強い見解（有身見）である。それに似た執を捨て去らない限り、解脱する為の諸々の努めは無意味となるだろう。涅槃を対象としてそのように考えること一切が有身見ではないが、『本質として有る私が、何時か涅槃を得るだろう』と思ったり、それに似た『その私の我がものに、涅槃は何時なるうか』と思ひ捉えれば、それは有身見であるので、まさしくそれが涅槃を得る障害を為すと説かれ、輪廻より解放されたいと欲す者が、それを捨て去らなければならないと説かれたので、プトガラと法（現象）は本性が無いと了解することは、声聞独覚にも有ると示された。それ故に、涅槃を求める者達が、前述のそれら一切を手放して、斯くも「勝義として何かに涅槃を生じさせる」一捏造は無く、「輪廻が斥けられる」一滅尽も有るのではない。そこに、何かが滅尽せられる為に考察された輪廻が、自性として成立した何ものであろうか。それが得られる為に考察された涅槃も、自性として成立した何であると考えられようか。

あるいは、輪廻と涅槃の何も自性として成立したことは認識されていない故に、如何なる有情であろうとも涅槃であるものへ輪廻より排出され一導かれることや、涅槃を生じさせようと努めることによっても、為し得ぬことに、如何なる涅槃が考察されるのか一考察されるに適さない。

そのように了解して、それについて分別考察しない者は、確実に輪廻の荒野より

²² これは…似ている。：前述とは、第 7 章「その論法とは、一般に生じるだろう絨毯は行為者である拠所であることと、その「生」はそれに依拠する行為であることと、絨毯が生じようとする時に行為者である拠所の絨毯は無く、その生じる行為が有ることも、自他二派ともが勿論述べなければならない。けれども絨毯が生じることが勝義として成立したならば、その二つが「拠所」と「依拠するもの」であることは自らの自性として成立した本性であるので、如何なる時もそれにおいて誤らない必要がある故に、その時でも絨毯が有る必要がある。従って、生じた以前に既に成立し、再度絨毯として生じなければならなくなる。」であるか？

この論法を「束縛されたもの」と、「解放されつつあるもの」に応用する。

超越し、解脱の都へ到達したとなるだろう。

第二項 [了義の教証と合わせる]

そのように、輪廻と涅槃や、束縛と解脱は本性が無いと正理が示したまさしくそれは、深甚な経証をも具えると示すことと、「『色形は束縛しておらず、解放されていない』等と説かれた一切を本章によって説明したまえ。」と示す為に、了義の教証と合わせた一部を挙げれば、『降魔経』より、

「そしてその時、若き文殊によって、罪深き魔が門の横木の縄で縛り付けられたように地上に転がって、『私はきつい縄で縛られた。私はきつい縄で縛られた。』と泣きながら慟哭するような姿であると思われた。

文殊が言った。『罪深き者よ。それによってお前が常に縛られ、耐えうる束縛ではない、この束縛より他の余にもきつい束縛が一つ有る。

それは何かといえば、このように、誤った慢の束縛と、欲と見解の束縛であり、罪深き者よ。これは束縛であるが、この束縛より他の殊更にきつい束縛は、有るのではない。お前はそれによって常に縛られているのであるが、耐え得る束縛ではない。

他にも、罪深き者よ。仮にお前がもし、再び解放されたなら喜ぶか？』

(魔が) 言った。『喜ぶ。』

それから、善良な夜摩天の一人の天子が、若き文殊へこう言った。『文殊よ。罪深き魔を放してやれ。自分の巢穴に返してやろう。』

そして若き文殊が大変罪深き魔へこう言った。『罪深き者よ。放たれたお前は、誰によって縛られていたのか。』

(魔が) 言った。『文殊よ。誰が縛っていたかは知らない。』

(文殊が) 言った。『罪深き者よ。お前が縛られていないことから縛られたと想った如く、一切の凡夫である幼子は、無常を恒常であると想い、苦を楽と想い、無我を我であると想い、不浄を清浄であると想い、色形が無いものを色形であると想う。諸々の受(感受作用)は無く、諸々の想(識別作用)は無く、諸行は無く、諸識が無いものを、受や想や行や識であると想うのである。他にも、罪深き者よ。お前が解放されるとなれば、何より解放されるとなるのか。』

(魔が) 言った。『我は何からも解放されるとならない。』

(文殊が) 言った。『罪深き者よ。その如く、解放されるとなるそれらも、清浄ではない想であるものを完全に知る以外に、何からも解放されるとなることは無く、それを完全に知って、〈解放された〉という。』

と説かれ、この経証より、夢の中の燃える火が水によって消された如く、誤った分別の藤蔓がただ完全に切れことを「解脱」という。

第三項 [意味を要約して章の名を示す]

輪廻を廻ることと苦しみを超越した（涅槃を得た）ことや、煩悩によって束縛されたこととそれが切れた解放は、自らの自性として有るならば何も適正でないとして了解して、それらを真実であると捉えないことと、名前という世俗名称に従って設けられたのみに、それら一切が非常に合理である深甚な縁起への確信を堅固にしたまえ。

「束縛と解脱を考察する」という十偈の我性、第十六章の解説である。